



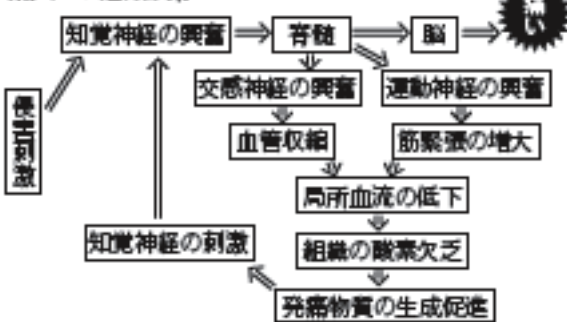
香曾我部義則先生の今月のカルテ ⑥4

慢性痛とペインクリニック

■プロフィール こうそがべ・よしのり 昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に、平成16年から現職。日本麻酔学会専門医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生が、痛みの治療について説明してくれるコラム。第64回は、痛みの持続や増加を引き起こす「痛みの悪循環」について詳しく紹介してくれます。

痛みの悪循環



症部位が治療により修復

痛みを受けました組織や炎症部位が治療により修復

痛みを放置しておくとも慢性の難治性疼(とう)痛に変化する恐れも…早期に十分な鎮痛対策が大切

「痛み止めの飲み薬、注射、ブロック注射などは一時しのぎでしよう？」という質問をよくいただきます。元来痛みは、警報や生体防御反応の役割を果たすので、痛みを起す原因に対する適切な処置が必要なのはこの言うまでもありません。損傷を受けた組織や炎症部位が治療により修復されれば、通常痛みは消失します。では組織の修復が終了するまで我慢することが正しいのでしょうか。もちろん答えはNOです。胸や腹、背中にメスを入れる手術、多発性骨折など侵襲が強い場合、疼痛対策をせず痛みを我慢することはまず無理です。忍耐を超える痛みはできないだけ鎮めることが大切です。では手術直後のような激痛でなければ痛み対策は不要でしょうか。そんなことはありません。その理由は「痛みの悪循環にあります(図)」。骨折などの外傷により組織が損傷されたり、炎症が生じるとブラジキニン、ヒスタミンといった発痛物質が産生されま

す。この発痛物質は侵害受容器を刺激し、発生したインパルスは脊髄後根、脊髄、脳へ伝わり「痛覚伝導路」と呼び最終的には脳皮質に至り疼痛を感じることになります。痛みの感覚は交感神経を興奮させ、血管を収縮させ、筋肉の緊張を増し、局所の血流低下が生じ組織の酸素欠乏が起ります。酸素不足は発痛物質の生成促進に拍車をかけ、神経をさらに刺激して痛みの持続増加を引き起こします。これが「痛みの悪循環」です。さらに原因が単純な痛みであっても痛みが非常に強かったり、痛みが持続している状態が長期にわたると、神経系の応答が過敏になり、元々の原因よりも強い痛みに変化したり、元の部位とは違った部位に痛みが生じたり、また、恐怖、不眠不安、不眠といった情動要素の悪化から精神的な疼痛反応をも生じさせます。

つまり、痛みを放置していると組織の損傷が治っても痛みが持続し、生体防御の意義が無くなっても続く、慢性の難治性疼痛へ変化するのです。そのため、早期に十分な鎮痛対策を行うことが肝要です。痛みを伝える経路のいずれかの部位あるいは全ての部位で痛み刺激を遮断してやることが大切です。神経ブロックをはじめとする鎮痛対策は、ただ単なる一時しのぎではないのです。

詳しくは、梶木病院 ☎086(293)3335 へ。

086(293)3335 へ。